

ともに 歩もう 石巻だより

2018年の秋号を休刊し、ご無沙汰申し上げました。この冬号から、新しい連載を、朝日新聞編集委員上田俊英が始めます。4面もご覧ください。

女川から出発④

あの日は小学6年生。中学校で活動を始めた。「千年後の命を守るために」その担い手たちの今を追う。

鈴木元哉さん「ここは居場所だから」

晴天の2019年1月13日。鈴木元哉さんは成人式を迎えた。女川町唯一の中学校、女川中の第1回卒業生だ。スーツ姿で早めに式場へ来て、同級生数人で段ボール箱をてきぱきと運び込む。

六十数人の同級生全員へ配る真新しい地図を詰めてきた。「女川いのちの石碑」の場所を示す町全域の地図だ。石碑は中学1年の時に学年全員で練り上げた津波対策の一つ。被災した町内すべての浜に建てて、そこより上へ逃げるように伝える。中2の冬から始めた募金活動で資金を集め、中3の秋に1基目が完成。すでに17基建てた。あと4基の完成を待つ。

中学卒業後、元哉さんは同級生十数人と「女川1000年後の命を守る会」をつくり、1基ごとに浜の人々と除幕式を行う。17基目の式は18年8月11日に町中心部から約12キロ南の飯子浜で行った。元哉さんは、7月の豪雨で被災した愛媛県西予市

でのボランティア活動を終え、陸路を16時間かけて戻ってきた足で参加。「一緒に除幕を」と浜の人々を明るく呼び込んだ。町中心部の鷺神浜で生まれ育った。両親は女川港のそばで旅館を営んでいた。4階建て旅館の2階が自宅だった。妹弟と父方の曾祖母と祖父もいる大家族だった。

元哉さんが生まれた時、82歳だった曾祖母は、ベビーカーを押して日光浴に連れ出してくれた。いつも一緒に食卓を囲んだ。ひ孫たちは曾祖母を「ぴいちゃん」と呼んだ。「ひいおばあちゃん」を意味する方言だ。怒られた記憶はない。優しくかった。

曾祖母が毎日のように繰り返した話がある。43歳で経験したチリ地震津波の話だ。「大きな地震が来たら津波が来つから気をつけるよ。高いところへ行け」と説いた。テレビアニメ『おじゃる丸』を見ている横から「気をつける」と始まった時は、さ

すがにうつとうしかつたのを覚えている。生きた教え

あの日は女川第一小学校6年生。体育館で卒業式の練習中の時だった。校庭へ急ぎ、息をつき、防災無線放送に気づく。怖くはない。(わ、すごい地鳴り。一生にあるかないかくらいじゃん)と思う一方で、来る、と曾祖母の教えが浮かんだ。

3年生の妹も校庭にいた。地割れにおのき、それどころではなかったが、防災無線の放送内容はしっかりと聞き取った。

1年生の弟は下校途中。踏ん張りながら、(でっけいな。来んな。逃げっかな)と曾祖母の教えを思う。「ウー」と鳴り始めた防災無線も覚えていた。落ち着いていた。

同じく曾祖母から学んだ父の行動は早かった。2階の自宅で休憩中だったが、直ちに1階、3階、また1階と駆け回り、館内全員に高台への避難を指示した。

震源は近く、すぐ来ると思い、心臓は早鐘を打つ。2階へ戻り、避難用バッグを、

あの日、先生が両親と6歳の次女と4歳の長男を亡くしたことを▼「でも仙台でね」と先生は続ける。会場を見渡し「ほりみあ、どこにいる?」。手をあげた振り袖姿の堀松美亜さんへ笑顔をむけ「抱きつかれたんですよね。警察に捕まるかと、

明日の風

成人式で小中学校の恩師たちが祝辞を述べる。女川町で開かれた今年1月の式では最後に、現在は

牡鹿中で教える鈴木実先生がマイクを手に「お礼が言いたくて来ました」と語り始めた。新成人が女川中3年の時の学年主任だ▼「みんなが入学してからの3年は先生にとつて最も苦しい3年間でした。でも学校でみんなが笑顔で頑張ってくれるのを見て、今、生きています。正直、今もつらいです。教室では生徒に『頑張つて』と言っただけで、自分自身も頑張っています」▼五十数人の新成人は静かに耳を傾ける。目頭をぬぐう人も。あの春に中学校へ入学した。先生自ら語ったことはない。新入生は上級生たちから聞いた。あの日、先生が両親と6歳の次女と4歳の長男を亡くしたことを▼「でも仙台でね」と先生は続ける。会場を見渡し「ほりみあ、どこにいる?」。手をあげた振り袖姿の堀松美亜さんへ笑顔をむけ「抱きつかれたんですよね。警察に捕まるかと、



手に待っていた曾祖母を背負う。痛がるのもかまわず軽トラクへ押し込む。山は近い。港へ向かって尾根が数本伸び、旅館はその谷間の海辺にある。数分で山に着いた。

内陸育ちの母の行動は逆だった。港から約2キロ内陸の小学校へ迎えに行くのに軽ワゴン車で信号待ちの時だ。停電で消えた信号、地割れを目の当たりにし、頭の中は真っ白になる。とにかく学校へ向かった。

校庭で3人の子を探した。「いったんうちへ行く」と兄妹と同級生2人を車に乗せそこへ戻ってきた弟も乗せて、出発した。

車中で兄は「神社行くべー」と声を張り上げた。港に近い山の上の熊野神社を提案。弟は「病院がいいんじゃない?」。神社下の山腹の町立病院まで車で行ける。弟をささざるように「神社神社!」と兄。母は無言だった。兄弟の声は耳に入らない。旅館に着いた。館内は誰もいない。

外に出た。段差が生じた路上で立ち往生する車が母の視界に入った。えっ、やばい。あわてた母は「どこ行く」。切羽詰まった声。兄弟は一齐に「神社!」「病院」。

数百メートル先の山腹の病院へ。満杯の駐車場を回る車から兄が港を見下ろすと、潮が引き、棧橋の脚があらわに。病院裏に駐車し、院内へ。2階の窓から、崖壁へ流れ込む波を見た。地震発生から約35分後だ。窓辺の大人たちが言葉を失った中、病院1階天井下まで達した。病院敷地から階段200段を上った神社には達しなかった。

かくしゃくとしていた曾祖母は14年に永眠した。「ぴいちゃんが教えてくれたから避

難できたよ」と感謝して見送った。

何もできない……

今、守る会は講演も引き受ける。元哉さんは講演で、今も続ける理由を問われると、こう答える。「ここが居場所だからです」

守る会の活動が先にありきではない。同級生といるのが楽しい。もちろん、進学生先の石巻高校でも部活のバスケットボールを楽しみ、今は東北工業大学の経営コミュニケーション学科に通いながらバンドで楽しくギターを弾く。ただ、同級生なら一緒に思い出に浸れる。今はないソロバン塾へ行く道は大潮のたぎに冠水。「チャレンジャーの俺はチャリでつっこむんだ」。衰退しか感じなかったシャッター通りが懐かしい。

同級生なら言葉にしなくても伝わるものもある。あの夜。食べ物も飲み物も何もない。(どうするんだろう。何したらいいんだろう)。目を凝らし、耳を澄ます。誰かのラジオが気仙沼市の火災を伝えている。

避難所で大人たちが話している。「あの人は」「だめだったらしい」。みな沈痛な面持ち。(え……、どうしよう……。何もできない)。そんな思いが押し寄せる。

旅館は全壊だった。中学校の入学式へ行くにも制服がない。支援品で身支度したが、それで足りたのか、心配がつきなかった。



山の上で中学校は被災を免れた。1年生の教室は最上階の4階。ベランダに出れば眼下に変わり果てた港一帯が広がっている。教室では涙をぬぐう同級生たちを何度も目にする。(家族を亡くした人の気持ちは一生わかることはない)との思いを深めた。パンと牛乳だけの給食を終えた午後一番最初の社会科の授業で先生が「ふるさとのために何ができるか考えてみよう」と告げた。何かしたい。先生を見つめた。内気な性格を中学校で変えたいとも思っていた。「書ける人は黒板に書いて」と先生。

次々に立ち上がる。元哉さんも。黒板前に行列ができる。

「今まであった津波のことを学んで今後に生かす」と書いた。思いをぶつけた。ぴいちゃんが忘れないことで自分たちは助かった。忘れてほしくない。生きてほしい。

その光景は、津波対策の立案を促す次の授業へ先生を突き動かし、今につながる。その年11月によく仮設住宅に入居できた。3階建ての最上階。結露がひどく、カーテンはすぐ黒くなる。母は浴槽の残り湯に漂白剤を加えて洗っていた。カビの健康被害を憂える報道も出たが、

母は「気にしたら生活できない」と明るく言つてのけた。高校3年の10月まで仮設暮らしは続いた。あの頃。両親は一言も不安を口にせず、落ち込む姿も見せず、旅館再建の苦勞も感じ取らせなかった。すごいな、と今も思う。

思いました。会場がどつと沸く。「そうするとね、元気をもらおうんです」▼昨年4月のことだ。専門学校に通う美亜さんは仙台駅構内を歩いていた。むかつて来る人々。そこに出張帰りの先生がいた。「みのるっち!」。口をついて出たのは、中学時代、親愛をこめて呼んでいた名。女川中の卒業式以来だ。美亜さんが入ったテニス部の副顧問が先生だった。うれしさと懐かしさがこみあげる▼大会の時はいつも送迎してくれた母の思い出もよみがえる。家は町立病院が立つ山のふもとにあった。あの日、病院1階へ駆けこんだ母は全身つかりながら流れに耐えた。その後、病と闘い、一人娘の晴れ着姿は見られずに旅立ったが、不自由な仮住まいが続く中で中学3年間を支えてくれた▼先生の話聞きながら美亜さんは思った。私たちも助けられた。つらいことは忘れられないけど、一緒にいた3年間は、助け合つてこられた3年間なんだな。「感謝しかありません。これからも応援しています」と先生は結んだ。

雄勝巡礼

第2章

石巻市雄勝町の港そばにあった
雄勝病院の家族の話が続けよう。

[第7回]

「10メートル以上」告げた防災無線

午後2時46分。

石巻市では震度4

以上のゆれが約

160秒続いたと

いう記録もある。

長かった。

市雄勝総合支所では、ゆれが収まるのを待たず、約1分後に2階の無線室から防災無線放送が始まった。緊急一括放送で音量は最大だ。屋外スピーカーから「ウー」とサイレンが5秒間流れ、周囲の山へ響き渡る。

「津波の恐れがありますので沿岸付近の方は高台へ避難して下さい」。またサイレンが流れ、同じ言葉が繰り返される。

午後2時51分頃に第2報。

「ただ今、宮城県に大津波警報が発令されました。予想される津波の高さは6メートル以上となっております。沿岸付近の方は直ちに避難して下さい」

午後3時10分頃、直ちに避難して、と第3報がまた告げた。

午後3時15分頃だ。「10メートル以上になった」。消防署員からラジオ情報が無線室へもたらさ



れた。サイレンが響く。

「予想される津波の高さは10メートル以上となっ

ております。沿岸付近の方は直ちに避難して下さい」。これを屋外スピーカーは2度告げた。

総合支所の前の広い駐車場を出て、県道を渡ると、仙台銀行雄勝支店がある。そこは埋め立て地。銀行の背後は海だ。支店員高橋富貴子さんはゆれの中、外へ。(来る)と思った。

目の前で道路に亀裂が入っていく。隣家の石塀が崩れ、土煙が立ちのぼる。防災無線で「6メートル」を聞き、その倍の高さを確信した。(これは大変だ。雄勝はためだ)

家での教えが刻み込まれている。町北東の荒浜で育った。祖母は、1933年の昭和三陸津波で両親と2人の子を失い、孫娘には幼い頃から山への避難を説き、雄勝湾の奥では「必ず高くなる」と言い続けていた。

海辺の銀行から約0・2キロ

内陸の行員駐車場で待機。車が次々に来る。走ってきた人が叫ぶ。「来たから逃げろ」。眼下の銀行。背後の海がせりあがる。

駐車場奥の細い山道へ。子どもは先に行かせ、お年寄りは皆で抱えるようにして走った。

山並みが海岸へ迫る町だ。住宅や商店は谷筋にあり、家の裏に、店の裏に、山がある。

町唯一の大型店「スーパーやました」店長の佐々木寿和さんは本震の時、自宅にいた。(津波だ)と思った。約0・1キロ先の県道沿いの店へ急ぎ、従業員全員を帰らせた。戻ると、自宅前に人々が集まっていた。

防災無線で「6メートル」と聞き(もつと高くなる)。海岸線が入り組んでいるから。常襲地帯の知識が染み込んでいる。

次に「10メートル」を2度聞いた。(こんでもないものが来る)。目の前の堀を水が逆流してきた。自転車で来た消防団員が「堤防を越えた」。一斉にそばの山へ。最後尾でお年寄りを押し上げ、首まで水につかりながら、はいあがった。

総合支所から撮られた写真に

よると、仙台銀行前の県道へ水が流れ込んできたのは午後3時23分。それが道いっぱいに広がっ

「いまどこですか?」最後のメール

雄勝病院の前にも防災無線の屋外スピーカーがあった。最大の音量で放送が流れていた。

最初の長いゆれがおさまると、主任栄養士の佐々木弘江さんは「行ってくるから」と事務職員に声をかけ、出ていった。

3人きょうだいの末っ子を保育所へ迎えに行くのだと職員は察した。震度4以上は保護者が迎えに行く決まりだった。

その頃、市職員の夫勇人さんも約4キロ内陸の森林公園から海辺の保育所へ向かっていた。

渋滞はない。弘江さんより先に着き、長男大輔君を約2キロ内陸の味噌作へ連れ帰った。

中学1年生の次女花菜さんと父の幸手司さんは自宅隣の親類宅にいた。勇人さんは、親類に「頼みます」と大輔君を託し、

花菜さんに「裏山へ逃げなさいよ」と念を押し、車へ戻った。親類が大輔君を抱き上げ、花菜さんは「おじいさん」と声を張り上げ、波を見届けようと

する幸手司さんの手を引く。避難訓練でも登っていた裏山へ。勇人さんは総合支所へ急いだ。

次の瞬間、平屋が流されてきた。1分後には車も。午後3時25分、銀行1階は水没した。

最後のメール

道中の葛藤を今も忘れない。支所は海に近い。確実に津波に遭う。家族も心配だ。一緒にいたいのが、公務員の務めがある。

中学3年生の長女春香さんは午前中に卒業式を終え、海のそばの精肉店2階の友人の部屋にいた。津波を予感した。小学校でも地震の避難訓練に続けて津波は結びついていった。

友人の祖父の指示で靴も履かず外へ飛び出す。友人の祖父は海をにらみ「だめだ。水が引いている」。靴を履き、避難開始。

が、店の前の県道は、避難を急ぐ車が途切れず、渡れない。ようやく1台が止まり、運転手が叫ぶ。「お前ら、はよ逃げろ」

駆け出した。「スーパーやました」を過ぎて右へ。長い階段を一気にのぼる。丘の上の中央公園へ。息を切らせながら着いたのは午後3時前だった。

公園から両親の携帯電話を鳴らす。つながらない。

防災無線放送は「6メートル」から「10メートル」へ変わる。(どんどん高くなる)。両へ

あの日からの原発 ① | 朝日新聞編集委員上田俊英が記す

原発が淘汰される時代 女川1号機の廃炉を考える

昨年10月25日、東北電力の原田宏哉社長は会見で、女川原発1号機(女川町、石巻市、出力52万4千キロワット)の廃炉決定を表明した。「経済合理性を総合的に勘案した」などと理由を述べた。

東日本大震災と東京電力福島第一原発(福島県大熊町、双葉町)事故から、まもなく8年。この間、原発をめぐる状況はどう変わったのか。考えてみたい。

福島の事故まで、日本には54基の原発があった。このうち廃炉やその方針が決まった原発は、女川1号機など21基。一方、再稼働した原発は9基だけだ。

残る24基をみても、今年2月末現在、原子力規制委員会の審査で再稼働が認められた原発は6基。審査中が女川2号機をはじめ10基ある一方、同3号機を含む8基は再稼働の申請さえしていない。

安倍晋三政権と電力業界は原発の再稼働に邁進し、政府は2030年度の発電に占める原発の割合を「20～22%」とする目標を掲げる。しかし、日本は、現実には廃炉時代へと向かっている。

廃炉時代の扉を開けたのは、福島の惨禍を経て私たちが手にした原発の安全強化だ。再稼働には1千～2千億円規模の安全対策費が必要になり、多くの原発が経済的に見合わなくなった。

福島の事故の反省から日本では政府から独立した原子力規制委員会が設置され、原発の運転期間は法律で原則40年と定められた。1回だけ延長を申請できるが、それも20年を超えない範囲とされ、運転期間は最長でも60年になった。

その規制委がつくった新規規制基準により、日本でも原子炉損傷のような「過酷事故」対策がようやく義務づけられた。

地震や津波対策が強化され、最新の科学的知見を既存の原発に反映させる「バックフィット制度」も導入された。

そもそも人がつくったものは設計やデザインに、その時代の技術や思想が反映される。自動車を考えても、40年前の車なら、それがいかに名車でも、最新の車と同じ安全性をもたせるには補強や改造が要る。原発も同じということだ。

そして、日本の原発に課された安全対策費は、世界的には決して高くない。

日本は原発の発電コスト計算の際、建設費を出力1キロワットあたり37万円と

している。05～09年に稼働した最新の4基の建設費から算出された。

女川1号機のような50万キロワット級の原発なら、建設費は2千億円程度。出力120万キロワット級の大型原発なら4400億円程度となる計算だ。

世界はどうか。原発の安全強化は世界共通の流れだ。福島の事故でその流れは強まり、原発の建設費は高騰した。

年明け間もない1月17日、日立製作所は英国での原発2基の建設計画を凍結すると発表した。安倍政権は原発輸出を成長戦略の柱にすえ、強く後押ししてきたが、これで「全滅」した。

日立の計画の総事業費は、最大3兆円ほどとされる。1基1兆5千億円だ。

三菱重工業がトルコで進める4基の建設計画も昨年12月、断念する方向と報じられた。総事業費は4兆円以上。こちらでも1基1兆円を超える。

原発は1基1兆円時代に入って競争力を失い、淘汰され始めた。では、私たちはそんな原発と、どう向き合えばいいのか。

人がみずからが使う電気のつくり方を選ぶとき、求めるのはもちろん安さだけではない。社会的価値、倫理的価値などさまざまな価値が絡み合うなかで判断するはずだ。その際、重要なのは結局、「使いたい」と思えるかどうかだろう。

福島の事故後、私たちがそれぞれの価値観を反映させる道は広がった。

まず、司法が原発の安全と、少しずつ向き合い始めた。これまでに再稼働した9基のうちの5基は、運転差し止めの仮処分決定や判決を受けた過去をもつ。

立地自治体の判断も重みを増した。

東電柏崎刈羽原発6、7号機(新潟県柏崎市、刈羽村)は再稼働が認められたものの、新潟県の花角英世知事は「県民の納得が得られるまでは動かせない」とし、再稼働の是非を判断する際は選挙で民意を問う考えを示している。

日本原子力発電東海第二原発(茨城県東海村)も再稼働が認められたが、立地周辺6市村との間で「実質的に6市村の事前了解をとる」とする新安全協定を結んでいて、再稼働は見通せない。

私たちは首長選挙などを通じて、再稼働の是非の判断に、実態としてかかわれる。女川町と石巻市も同じである。

親へ「逃げて」とメールを送った。視界には流される家々。耳に届く悲鳴と泣き声。(え、うそでしょ。なんで、なんで)。見渡す限りすべてが海になる。正視できず、目をそらした。

勇人さんは総合支所に戻ると、避難してきた近隣の人々のために、2階へ灯油を運び始めた。その最中の午後3時12分。携帯電話がメールを受信した。弘江さんからだ。件名は「Re」のみ。急ぎ返信機能を使ったのだろう。「いまどこですか?」

本文はその一文だけ。勇人さんは急いで「高台に逃

がろ」と書いて返した。その直後だ。口伝えで津波情報が「10メートル以上」に切り替わったと聞かされた。灯油を最上階の3階へ移す。ほどなく屋上避難の指示が出た。水は3階の天井下にどどまり、人々は屋上で被災を免れた。

町内で最も高さを増したのは勇人さん家族が暮らしていた味噌作。標高約24メートルまで達した。山頂で次女花菜さんは、黒い壁となった波を見た。病院付近では標高約20メートルに達し、病院屋上を越えた。その瞬間まで患者のかたわらにいた当時42歳の弘江さんの姿が、同僚の目に焼き付いている。

勇人さんは思う。父の前では気丈にふるまう長男も、母が迎えに来たなら泣きすがただったろう。そうすれば一緒に避難できた。いや、と思い直す。「ママは行かなくちゃいけない」と諭し、やはり病院へ戻るのだろう。責任の強い人だから。でも、もし自分が先に着かなければ。思いは今もくすぶる。

